

CONTENTS COMBAT

2017.Oct.
No.499

10

Cover Design
Favorite Graphics Inc.
Cover Photo
"THE WALL" Official
©2017 AMAZON
CONTENT SERVICES LLC
©WORLD PHOTO PRESS 2017
※本文中の価格は消費税込みの
総額表示です。



【巻頭特集】

Combat Front Line Movie Special

004 『ダンケルク』／『ザ・ウォール』

【第1特集】

014 THE US Service HandGun
米軍制式軍用拳銃

【第2特集】

046 **APSよ永遠なれ!**

【特集／ミリタリー】

040 第1回「MVG2017 ASAMA」
開催レポート&
Old Fort Macather Day
マッカーサー要塞の歴史祭り

●Report by Sam Motojima

074 **ニッポンの力こぶ**

092 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
VEL-TYE 防弾ベスト特集&特殊部隊装備アイテム
●解説：松原隆 ●撮影：山崎 学

117 **Militaria Roundup!**
アメリカ軍レーションと関連アイテム

012 **COMBAT FRONT LINE**

058 **WESTERN ARMS**
COLT MKIV SERIES'70 SUPER PREMIUM SERIES

064 **WESTERN ARMS**
SFA V10 ULTRA COMPACT ALL BLACK & ALL SILVER

068 東京マルイ
AIR HANDGUN SERIES



078 突撃!!ぴっちょりーな☆
080 The World of Little Armory
082 **NEW GENERATION STYLER**

●fujiwara

102 **トイガンニュース**

102 タナカ ベレッタM9A1《ウエボンライト・モデル》
103 タナカ コルトS.A.A. 1stジェネレーション4 3/4インチ《“レンジャー”ニッケル》
104 MULE ダブル・バレル・デリンジャー
105 長興 無可動キットモデルシリーズ

108 **サバゲ三等兵**

●織本知之

112 **WANCHER'S STYLE**

●織本知之

114 **PROJECT NINJA**

●morizo東京装備BAKA)

116 **DJちゅうの妄想雑記ノート**

128 **PRESENT**

146 **Goods & Accessory**

150 **中部・東海 ミリタリーショップ紀行**

154 **兵装嗜癖** ●by fujiwara

156 **ミリいじ技研** ●by Tomoyuki Orimoto

196 **COMBAT初の広島出張戦闘!**
ミリタリーショップ&フィールド アルム
～広島のスバゲはぶち面白いけえみんな遊びに来んさい!編～

200 **中田商店グッズ**

202 **S&Grafグッズ**

129 **GAME OVER THE TOP**

132 **US SHOOTING LIFE 特別編**

134 **読んで覚える**

TakuのHOW TO Shooting 射撃のススメ 特別編

136 **アラフォーズ!**

140 **トイガンズ・ジャンクション**

172 **ビクトリーショー**

173 **サバ天**

174 **ブラックホール**

175 **有明防災フェア**

176 **編集長日誌**

177 **バックナンバーリスト**

178 **ミリタリー・コレクション**

180 **レア・ミリタリー・コレクション**

182 **A STITCH IN TIME**

183 **KUZAN メテオライト・ファイター**

184 **狩野健一郎のシネマ放浪記**

185 **狩野健一郎の新作DVD紹介**

186 **蛙のゆびさき**

188 **戦車兵通信 WORLD OF TANKS**

190 **コンバットマガジン・インフォメーション・センター**

191 **読者プレゼント応募方法**

192 **編集後記**





特集：米軍制式軍用拳銃

THE US SERVICE HANDGUN

今年1月、ショットショー開催期間中に米軍次期制式採用拳銃トライアルの結果が前触れもなく発表された。結果はすでにご存じの通り、SIG P320がM17として採用される事が決定し、今年11月から調達・支給が開始される。そんな今ホットな話題である米軍制式採用拳銃の歴史を紐解きつつ、今までにどんなモデルが採用されてきたかを徹底解説！さらに米軍制式採用拳銃となった3種のオートマチックを撃ち比べる銃番勝負番外編も合わせて紹介する！

●Photo: TOMO HASEGAWA



歴代米軍制式オート撃ち比べ!
銃番勝負 [番外編]

SIG SAUER P320 "TACOPS" Full VS BERETTA M92FS as U.S.M9 VS COLT M1991A1 as M1911A1 and Glock G34 Gen.4

米陸軍次期制式サイドアーム「U.S.M17」に決まったSIG SAUER P320。

その中でもミリタリーの本命である5インチ銃身“TACOPS” Fullをグアムのローカルマッチに実戦投入！
さらに先代米軍サイドアームU.S.M9（ベレッタM92FS）や、先々代のM1911A1（復刻モデルM1991A1）、
そしてトライアルの最終段階まで争ったというグロッカー族からも5インチフルサイズ仕様G34 Gen.4が参戦。
伝説の先輩たちと強力なライバルも揃い、さあ、勝負！ ショーブ！

●Text by Takeo Ishii ●Photo by Takahiro Soyama / Takeo Ishii ●Model 戦え!!びっちょりーな☆
●撮影協力: CQB GUAM (www.cqbguam.net) / ハイパー道楽 (www.hyperdouraku.com) ●参考: SIG SAUER (sigsauer.com)

『XM17』。トライアルに打ち勝ち、米陸軍に都合28万7,000挺が納入される事が決まったSIG SAUER P320。最新の情報では28万挺用意されるフルサイズが『U.S.M17』で、7,000挺のコンパクトが『U.S.M18』になるのだという。カラーはFDE（フラットダークアース）でオプションのサムセーフティ付き。また、現行のU.S.M9用ナイロンホルスターを共用するつもりなのか、フレーム前方ダストカバーは短いタイプになるようだ。

今回もほぼ5インチ（約127mm）の銃



“白銀比”を抱く米軍制式拳銃の系譜



「5インチ銃身フルサイズ」というくくりで並んだ歴代の米軍制式採用拳銃（相当のモデル）たち。左からM1911A1（1911～1985）を想定したコルトM1991A1。先のトライアルで最後まで争ったグロッカー族代表のG34 Gen.4。U.S.M17（2017～）想定 SIG P320 TACOPS Full。そしてU.S.M9（1985～2017）想定のパレットM92FS。

身長を“フルサイズ”と規定したのはM1911A1からの伝統だろう。G17やP226やUSP等、いま主流とされる軍用拳銃のサイズからすると、やや長い印象もあるが、U.S.M9=パレットM92FSもまた、銃身長は約5インチだった。

グロッカーだとG34がこのクラス。IDPA競技のレギュレーションに合わせ、サイズ規定ギリギリまで大型化する事でG17の射撃性能を高めよう、という目的で開発されたわけだが、そもそもこのサイズ規定箱の大きさ自体、M1911A1を基準に設定されたものだ。

M1911A1の全高と全長のバランスは“白銀比”と呼ばれる“1:1.414”に近く、人が本能的に美しい、と感じるフォルムとなっている。M92FSもG34も、P320 Fullもこれに倣っている。米軍関係者にはビジュアルに敏感な人が多いのかもしれない。

Data.

SIG SAUER P320 TACOPS Full

- 全長: 7.9インチ (202mm)
- 全幅: 1.3インチ (33mm)
- 銃身長: 4.6インチ (117mm)
- 重量: 26.5オンス (751g)
- 使用弾薬: 9×19mm
- 装弾数: 21+1発



“ただ撃つ”だけでなく、スティールチャレンジのステージを再現したり、タクティカルコースを組んだりして“実際に使ってみる”事で、ホルスターからの抜き易さやセーフティの操作性、携帯している時の安心感など、その銃の特色や全体像を総合的に比較・分析できる。



アメリカ陸軍 制式拳銃発達史

今年1月、アメリカ陸軍は次期制式拳銃としてSIGザウエルP320をM17ピストルとして採用すると発表した。先月号の『アメリカ陸軍 制式小銃発達史』で紹介したように、アメリカ陸軍は軍の造兵廠開発による小銃を制式化するのが伝統だったが、拳銃に関しては民間メーカーのものを採用してきた。今回は先月号で紹介した制式小銃に引き続き、アメリカ陸軍制式拳銃の変遷を紹介していこう。

●解説：菊月俊之

第1章 フリントロック・ピストルからパーカッション・リボルバーの時代

独立戦争の フリントロック・ピストル

大英帝国の圧政に反旗を翻し、1775年に独立を宣言したアメリカ植民地。最初の武力衝突から1ヵ月後の5月、植民地統一軍で、後のアメリカ陸軍となる「大陸軍 (Continental Army)」が誕生した。

独立戦争で大陸軍が使用した主要武器は小銃で、拳銃は主に騎兵の装備として使用されている。騎兵はカービン

(騎銃) と拳銃を携行したが、カービンは下馬時、あるいは静止した馬上でのみ使用。乗馬した際に使用する銃は拳銃のみだったが、疾走する馬上からの射撃では命中は期待できず、当たれば儲けものというのが実際だった。

独立戦争当時の植民地軍ピストルはフリントロック式の単発で、

- ① 捕獲したイギリス軍用
 - ② アメリカ製
 - ③ フランス軍用
- の3種類に大別され、①のイギリス製はヘビー・ドラグーン (Heavy Dragoon:

重竜騎兵) 用とライト・ドラグーン用の2種類が一般的だった。前者はジョージ一世時代 (在位1714~27年) に開発されたもので、.65口径 (16.5mm) で銃身長30cm。拳銃とカービンの中間的存在だった。そして後者は1759年頃に採用されたもので、銃身長は23cmと短くなったが、口径は.69 (17.5mm) と大型化している。

アメリカ製の拳銃は植民地の銃工が製作したもので、その多くはイギリス軍のライト・ドラグーン・ピストルのコピーだった。また各植民地が組織し



● シャルヴィユM1777ピストル (U.S. M1799)

1777年にフランスのシャルヴィユ造兵廠が開発した拳銃で、テーバーの付いた銃身やグリップ部のみのストック (銃床) など、当時のフリントロック・ピストルの中でも特異なデザインが特徴。この拳銃は大陸軍の軽竜騎兵で使用され、戦後は政府との契約でノース&チェニーが同銃のコピーをM1799ピストルとして約2,000挺生産した。

● DATA : 口径.73 (18.5mm)、全長34.5cm、銃身長20.5cm



拳銃は将校等の護身用として使用されるのが一般的だが、独立戦争当時は必ずしもそうではなかった。独立戦争当時の拳銃は基本的に騎兵用で、歩兵将校はこの絵に描かれたように「スポンツーン (Spontoons)」と呼ばれる槍の一種を携行した。これは武器としてだけでなく、指揮官である事を示す目印としての意味合いも持っていた。

Illustration: U.S. ARMY



アメリカ陸軍において、拳銃は基本的に騎兵の装備だった。これは馬上では長い小銃は扱いにくいのが理由だが、単発のフリントロックおよびパーカッション式拳銃では弾丸を発射すると、戦闘中に再装填するのは事実上不可能だった。このため発射後に拳銃は棍棒として使用される事が多く、当時の拳銃が大型だったのはこれが理由だった。絵は米英戦争 (1812年戦役) におけるテムズ川の戦いでイギリス軍を攻撃するケンタッキー乗馬義勇部隊。

Illustration: U.S. ARMY



▲ U.S. M1842ピストル

M1842ピストルは前モデルであるフリントロック式.54口径のM1836をパーカッション化した銃で、生産は民間メーカーのヘンリー・アストンが行なった。M1842は'45年から支給が開始され、竜騎兵中隊と乗馬小銃中隊に配備されている。またM1842は銃器の不足を補うため、南北戦争中に連邦軍 (北軍) によって使用された。

● DATA : 口径.54、全長36.2cm、銃身長20.3cm



▲ U.S. M1855ピストル・カービン

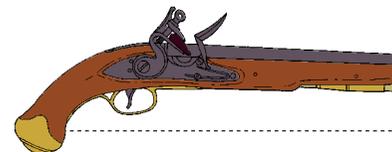
M1855はスプリングフィールド造兵廠が開発したピストル兼カービンで、ストックは着脱式。激発システムはパーカッション式で、メイナード・プライマーと呼ばれる巻紙式雷管をハンマーとニップルの間に付けられた涙滴型のパーツ内に収納している (この機構は同年に採用されたM1855ライフルと同じもの)。M1855は竜騎兵連隊と新編成の騎兵連隊に配備されたが、兵士たちからは不評だった。一部は南北戦争でも使用されている。

● DATA : 口径.58 単発、全長45.7cm (銃床装着時71.8cm)、銃身長30.5cm、重量1730g

た「安全委員会 (Committee of Safety)」も小銃のほかにライト・ドラグーン・ピストルをコピー生産している。独立戦争当時に製造されたアメリカ独自の拳銃には「ケンタッキー・ピストル (Kentucky Pistol)」が存在するが、この名は先月号で紹介したケンタッキー・ライフル同様、後に付けられたもので、当時は特別な名称は付けられていない。このケンタッキー・ピストルはオクタゴン (八角形) 銃身で、フロントおよびリアサイトを備えているのが一般的。ストックはカエデやクルミが使用され、グリップ部がシャープにカーブしているのが特徴だった。

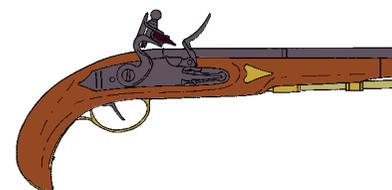
一方フランス製の拳銃だが、これが使用されるようになるのは1778年のフランス参戦後となっている。ただし、シャルヴィル (Charville) 造兵廠製の拳銃は全長51cmと長いもので (「ホース・ピストル」と呼ばれる)、騎兵だけでなく歩兵も使用している。またM1763-66ピストルも銃身長23cm、全長40cm、.69口径と大きくて重く、構造も複雑なためあまり好まれなかったという。ちなみにM1763-66ピストルは1769年頃に長さをも短めたものが登場。そして騎兵用に全長を短くしたM1777が採用され、これが大陸軍騎兵によって使用されている。

▼ イギリス軍ライトドラグーン・ピストル



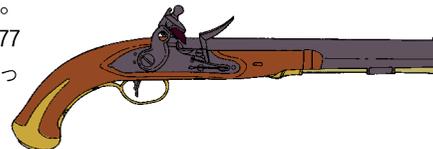
独立戦争中にイギリス軍が使用した.69口径のライト・ドラグーン・ピストル。独立戦争ではイギリス軍から捕獲したものが使用されたほか、13植民地がそれぞれに組織した安全委員会によってコピー品が製造された (コピー拳銃は一般に「Committee of Safety Pistol : 安全委員会ピストル」と呼ばれる)。

▼ ケンタッキー・ピストル



ケンタッキー・ピストルはアメリカ植民地で製造されたフリントロック式拳銃で、名称の「ケンタッキー」は同じく独立戦争中に使用されたロング・ライフルの俗称に由来。この名前は1812年戦役に従軍したケンタッキー民兵が使用した事から付けられたもので、これがピストルにも適用されている。グリップ部の独特な形状がケンタッキー・ピストルの外観的特徴の一つだが、銃自体に統一規格が存在したわけではない。口径も.45~.54と複数のバリエーションが存在する。

▼ U.S. M1805ピストル



M1805は連邦政府が建設した造兵廠で最初に生産された拳銃で、一般には造兵廠の名を取って「ハーバース・フェリー・ピストル」と呼ばれる。磨かれたストックに真鍮製のパーツが付けられ、それまでに製作されたアメリカ製拳銃の中で最も美しいものといわれる。M1805は2挺一組で軽竜騎兵に支給され、最終的に約4,000挺が生産された。

● DATA : 口径.54、全長41.3cm、銃身長25.7cm

MVG 開催レポート

2017 ASAMA

●Report by Sam Motojima ●Illustration Shin Ueda
 ●Photos by Sam Motojima, Shin Ueda, K.Hisatomi,
 B Co/100Bn撮影班
 ●開催協力 トライス/Duke Hiroi/
 KT ARTS, Reenactment Group B Co/100, NMVA/
 PHS HARU/NMVA日本軍用車両保存協会



米軍テントエリアにての集合写真。軍用テント群にM3ハーフトラックやジープ、キューベルワーゲン、サイドカー等と参加者が並ぶ。将来的に国内における各種軍用車とミリタリー大好き連中が大挙集まってミリタリー遊園地のようになってくれば嬉しい限りである。

総合的な屋外ミリタリー・イベントを目指して!

去る6月中旬、関東地方は梅雨シーズンの最中ではあったが、そんな中で北軽井沢にある旧浅間サーキットにおいて欧米スタイルのアウトドアミリタリーイベントが開催された。

『Military Vehicle & Game』略してMVGというミリタリーホビー、軍用車輛、リエナクメント、各種ゲームを含む各種ミリタリー系要素をミックスしてアウトドアホビーを楽しもうという内容だ。

これはお馴染みの『ビクトリーショー』『アホカリブスVN』『ハートロック』等のミリタリーイベント開催を行なって来たサムズミリタリー屋の究極イベントとして企画されたもので、同様の物を2000年前後に数回本栖ハイランドで開催していたが、今回はそれをリニューアルイベントとしたものである。

主催である私は根っからのリエナクメント好きであるため、各国の色々なイベントの見学や参加を行ない(当誌

でも何度か紹介している)、それらの経験を各種イベント開催に役立てて来た。

欧米では色々なミリタリーホビー大好き人間が寄り集まってイベントを開催する事が多く、社会的認知度の向上、マーケットの活性化及び同好の士達の連帯を図っているのだが、残念ながら日本においては全てのカテゴリーが分離状態で、後継者の育成や社会的アピール性が乏しいのである。

そんな事に長年憂慮感を覚えていた私は約20年前に実験的にサバイバルゲームと軍用車をコラボして開催してみたのが『アホカリブスVN』であり、数多くの軍用車がゲームに参加する事によりイベントのリアル感が増して大いに喜ばれた。その成果もありNAM戦の軍用車輛をコレクションする若者も増え、NAM戦グッズの需要も増大するという経済効果も少なからず派生した。『WWIIイベント』『ハートロック』も同様で、イ



本誌お馴染みのミリタリーイラストレーターである上田信氏とコンバット創刊当時の編集員だったリックキーン少年(現親父)も参加。

イベントを開催すると参加者に各種車輛と装備、エアソフトガンの需要が増えるという状況が発生する。

このような事柄から、購買層を掘り起こし、マーケットをより活性化



1.大型地車輻が次々にキャリアカーに乗って運ばれてくる。2.M3ハーフトラックや、米軍用車輛のレストアおよびコレクションを視察してくれているKTアーツさん。彼の協力が無ければこのようなイベントの開催は不可能であったろう。3.会場ではM3ハーフトラックや軍用車輛への体験搭乗会が開催され、参加者連に軍用車輛の楽しさを体験して貰っていた。4.大型軍用テントを皆で協力して建設。会場の雰囲気盛り上げるには皆の協力無しではなしえない。



APSよ 永遠なれ!

第27回APSカップ サバゲ三等兵APS部ハンドガンクラス参戦記

7月16日、APSカップハンドガンクラスの頂点を競いに全国より揃いし猛者219名。

狙い放った7665発のドラマがここに!

我らサバゲ三等兵APS部&戦え!! ぴっちょりーな☆も大奮闘!

1年の思いを込めたそれぞれの35発の物語。はじまり、はじまり!

●Photos by 織本知之



時系列で追う APS東京本大会2017 三等兵&ぴっちょ、 それぞれの35発!

昨年のAPS本大会から1年。稽古を重ねてきたサバゲ三等兵&ぴっちょ。その成果を、たったの35発に込めて、撃った夏の長い1日。ハンドガン部門の試合を、彼らの戦いぶりとともに振り返ろう!

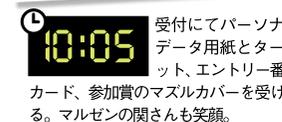
●Text by 織本知之

START!

時は来た! 2017年7月16日
in 産業貿易センター台東館



10:00 選手集合。この朝、それぞれの思いと愛銃を抱き会場入りした山中社長以下サバゲ三等兵APS部、そして戦え!!ぴっちょりーな☆



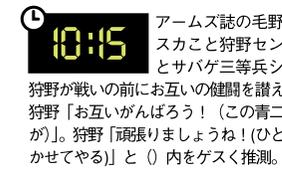
10:05 受付にてパーソナルデータ用紙とターゲット、エントリー番号カード、参加賞のマズルカバーを受け取る。マルゼンの関さんも笑顔。



10:08 パーソナルデータ用紙に必要事項を書き込む。ぶっちょりや名前とプレート競技の撃ち順さえ間違えなければOK。(わからなかったらそのへんのセンパイシューターに聞けばおしえてくれるはず)



業界に狩野はふたりいない!?
因縁の対決、ふたたび!



10:15 アームズ誌の毛野ブラスコと狩野センパイとサバゲ三等兵シェフ狩野が戦いの前にお互いの健闘を讃え合う。狩野「お互いががんばろう! (この青二才めが)」。狩野「頑張らましようね! (ひと泡ふかせてやる)」と () 内をゲスク推測。



練習がはじまると緊張しちゃう。



11:00 今回の本大会では5mのブルズアイをはじめ6m、7m、8m、9mと試射レンジが設けられ、それぞれのバックストップに10mターゲットが設置されていた。おのおのが10発の試射で慎重に調整。



11:15 先発グループの競技も始まっており緊張が高まる。ジャッジの背中「APS」の文字がまぶしい。

ハンドガン・オープンサイト部門
ついに競技開始!! まずはブルズアイ!



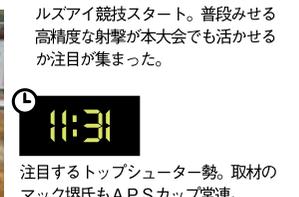
11:22 各選手待機イスに座り射撃を待つ。「やべー緊張してきた!」手のひらにブルズアイを書いてのみこめ! など。はたから眺めているぶんには楽しい待機所風景。



11:30 APS界にこの人あり。山中社長のブルズアイ競技スタート。普段みせる高精度な射撃が本大会でも活かせるが注目が集まった。



11:31 注目するトップシューター勢。取材のマック堺氏もAPSカップ常連。



11:38 「ええとそのええと...ありがとうございます」厳正なるジャッジによりブルズアイターゲットの得点とその確認。仙台修行ではAPSの申し子と讃えられた千葉隊長82点の2X、めきめきと射撃精度を上げてきたシェフ狩野90点の2X、天性の射手ぴっちょりーな☆92点の5Xと出だし好調。(千葉隊長を除く)



出だし好調のふたりの結果やいかに!?
プレート・スタンバイ!



11:51 さあよいよ勝敗を左右する要のプレート競技。練習の兎山中社長のプレートさばきが見られるか、プレート番長千葉隊長が盤石の射撃を見せるか、はたまたシェフ狩野乾坤一擲15発か、それともぴっちょりーな☆の...。さあ泣いても笑ってもプレートスタンバイ!

総合戦闘射撃

日本最北師団である第2師団が今年度初となる「平成29年度第1次師団訓練検閲」を実施した。普通科・特科・戦車等が共同して敵と戦う戦闘団を構成。今回は第25普通科連隊（遠軽駐屯地）が基幹となったため、「第25戦闘団」として、各種訓練を繰り広げていった。

写真・文 / 菊池雅之



第2高射特科大隊に配備されている87式自走高射機関砲。敵の航空機やミサイルを迎撃するための装備であるが、砲身を水平に向けて射撃すれば、敵戦車や装甲車とも戦う事ができる。

6月26日から7月1日に渡り、上富良野演習場において、第2師団による「平成29年度第1次師団訓練検閲」が行なわれた。第25普通科連隊を基幹とした第25戦闘団（第2特科連隊第1大隊、第2戦車連隊第2中隊、第2施設大隊第2中隊、第2高射特科大隊第1中隊等）を構成し、各種訓練を実施した。

今回は6月26日に行なわれた「総合戦闘射撃」に注目したい。

小銃や戦車、ミサイルなどが実弾（訓練弾）を発射する事を射撃と呼ぶ。これに「総合戦闘」が付いているのが、この訓練の目的を示している。個々の装備を射撃するだけでなく、状況に沿って、各部隊が連携していく。こうした

一連の戦闘がパッケージ化された射撃訓練となっているのが、総合戦闘射撃である。陸自において、このような大規模な射撃訓練を行なう事は度々あり、代表格となるのが、毎年8月に実施している「富士総合火力演習」である。

自衛隊の射撃訓練の朝は早い。この日も太陽が昇る前から準備がスター



2007年SEAL TEAM10の倉庫での写真。奥には珍しいLBT-6094 (タンカラー) の兵士が見える。



初期VEL-TYE社 SEAL TEAM plate carrier kit "HUGGER"

キットと言うだけに防弾ベスト・チェストリグ・ハーネス1セットで支給 (一般購入も同じ) されているようだ。HUGGERはジャンルに分けるとMBAV (MODULAR BODY ARMOR VEST) に入る。主流のリリース機能は付いていないが、構造が単純なのでフロントのカメラバンドを剥がしてやるだけで脱がしやすくなる。生地は丈夫な1000デニアーを使用し、負荷がかかるショルダー部分のベルクロ・テープ部分にはミリタリー・スペックの強力なもの採用されている。2007年、SEALチーム10が使用した事でマニアに火が付き現在に至る。放出品が出てくるたびにデザインが変更されたりしているのはユーザーの要望に応えてくれている証拠だ。日本での取り扱いはTAYLOR & STONERで行なわれている。

●2009年に購入したHUGGER 防弾プレートはSAPI仕様だ。



旧タグ



The Equipments of the U.S. Forces

[現用米軍装備カタログ] 第156回

VEL-TYE 防弾ベスト特集 & 特殊部隊装備アイテム

●解説: 松原隆 ●撮影: 山崎 学 ●協力ショップ: LAZY CAT (<http://lazycat.jp/>) / TRI'S (旧特工工房) (<http://tri-ss.com/>) / Gamis (<http://www2.ocn.ne.jp/~gamis/>) / トイソルジャー (<http://www.toysoldier.com.hk/>) / TAYLOR & STONER (<http://www.taylor-stoner.com/index.html>) / WARRIORS (<https://www.warriors.jp/>)

背面の防弾プレート・ポケットの位置がかなり上部に設定してある。



背面のMOLLEループにハンドカフを差し込んだ状態。

